

◎第21回定例会◎

1月18日（土）、宜野湾市の大山小学校にて、日本授業UD学会沖縄支部の第21回定例会が行われました。今回は、東京都立矢口特別支援学校の川上 康則（かわかみ やすのり）先生と、子ども相談支援センターゆいまわる代表取締役の仲間 知穂（なかま ちほ）先生にご講演していただきました。

○川上 康則先生○

「授業を支える多様な学び」

小学校・中学校の学習指導要領（平成29年3月）には、特別支援教育の充実が唱えられており、解説では、「学習上の困難に応じた指導内容や指導方法の工夫を各教科で行うことが」が盛り込まれました。例えば、国語科では、自分がどこを読んでいるのかわかるよう、文章を指でなぞりながら音読することや、読む部分だけが見える自助具／（スリッド等）を活用することが書かれています。

川上先生は、このように話した上で、うまくいかない子どもの気持ちになって、どんな支援ニーズがあるかを考えることが大事なのであり、そのためには、教師時自身に多様な学びが求められるのだとしていました。その中でも、授業を支える多様な学びのポイントとして、

- ・「当事者視点」を大切にすること
 - ・「やり方」(How to) を求める前に「あり方」(To be) を見直すこと
- など12の視点について紹介しました。

ゲーム性を取り入れた動作化やペア・グループ活動など、様々な活動も取り入れられ、参加者のみなさんも子どもになったつもりで楽しみながら、学んでいる様子が伺えました。

川上先生は、多くの授業を支える学びについて話していただきましたが、そこからは子どもを変えることよりも、まず「教師が変わる」ことが大事なのだということが伝わってきました。



○仲間 知穂先生○

「子どもの“できる”をデザインする

ーみんなが学習にコネクトできる学習環境ー

前回の沖縄大会でもご好評だった仲間先生に、今回もご講演していただきました。仲間先生は、前回、先生・保護者・支援関係者で、子どもに「届けたい教育」を目標として立て、両者が互いにチームとして連携していくことの大切さを話していました。

その上で、今回は、より実践的内容として、ヒトのできるを支える大切な7つの感覚（視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・固定受容感覚、前提庭）の重要性について、紹介してくれました。



例えば、からだを動かす感覚である固有受容感覚が十分に育っていないと、物を器用に扱うこと（物の状況を知り調整すること）ができないため、自分の行動の予測ができないことになります。自分の行動を予測できないということは、相手の行動を予測することの困難へとつながってしまい、結果思いやりが育っていないように見えてしまうことになります。

まさか、からだを動かす感覚と思いやりの気持ちが繋がるとは思ってもよらず、会場の先生方も驚いているようでした。

他にも、書くことの困難さがどうして生じるのかについて、その原因について説明すると同時に、困難さを解消したり和らげたりする方法についても、教えていただきました。

動作化を取り入れた活動など、さまざまな活動を交えながら説明する仲間先生の話は、子どもたちへの関わり方を見直す機会になったように思えました。

○川上&仲間先生○

「教えて Q&A コーナー」

Q&A のコーナーでは、教師それぞれが持っている子どもに与える「圧」について、どのようにして調整すればよいのか、そして調整するにあたって何かよいプログラムなどはないかなどの質問がありました。

この質問に対して、「厚」の自覚的レベルを整理した表を提示しながら、自分の圧を自覚し、子どもの実態・状況に合わせて自分の圧を調整できることが求められることについて話していました。さらに、その圧を調整するプログラムについても、紹介していただきました。



気になる子や問題をかかえている子がいると、私たち教師は、すぐに自分の理想とする子ども像へと変化を求めがちです。しかし、なぜ子どもたちが、問題とされる行動を起こしてしまうかを詳しくとらえることで、教師自身が変わりながら、より適切な子どもたちへの手立てや支援を考えていく。このことこそが、今子どもたちに求められているのではないのかということを、川上先生と仲間先生の講演を通して実感させられました。